

自虐雑感



入来院重伸

「自虐史観に陥ることなく、日本の歴史と文化に誇りを持って」 安倍首相が国民に発する強い思いです。この意図に沿った教育改革も最重要政策として急ピッチで行われています。

自虐史観に陥らないとは、すなわち東京裁判を否定しアメリカから押し付けられた憲法を否定する、というかなり極端な立場からの物言いなのですが、先のメッセージは違和感なく国民に受け入れられているように思います。

左翼やリベラルな文化人は、国家主義回帰

として強くこれに反発してはいるのでしよう。しかし、彼らの言説はもはや嘲笑の対象でしかなく、その無力さについてさえ誰も問題にしません。

現在の日本国民総右翼という状況を生み出した背景と原因は以下のようなものと思えます。

国力の衰退、格差の拡大とともに、将来に希望を持たない若者が急増したこと。

彼らインターネット世代は、その不満のけ口を中韓（特に韓）に求め、不特定多数の人間とこの感情を共有していること。中韓に対する優越感が自尊心を保つための最後の砦になっているのです。

中韓に物申すことをためらう言動はすべて売国行為とされ、結果、朝日新聞をはじめとする大手マスコミ、左翼、リベラル文化人は徹底的に嫌悪されるに至ったこと。

そして彼らネット右翼と称される若年俄かインテリ層と、彼らとは本来相容れなかった反知性主義の一般保守層が、今や「日本つていいよね」という共通の価値観で統一される日本人の主流となったこと、等々でしょうか。

安倍首相の運のよさとは、野党の完全無力に加え、アメリカの言いなりになって従来の保守層から多少の反発を買っても、これら若年層の支持は失わないということですが（彼らの代弁者でいる限りですが）。その政策によって最も不利益を被る層が、最も熱心な応援団なのです。正直笑うに笑えません。

先のメッセージに戻ります。自虐史観とは戦前を悪とする史観ですが、このような史観にわざわざ陥っていた日本人がいたとは不詳私到底思えないのです。東京裁判の当事者や一部左翼以外の日本人には「戦争はもう懲り懲り」という気持ちがあっただけで、糾弾す

べき悪も、責任を取らせるべき悪も、あたかもそんなものははじめからなかったかのごとく生きてきたように思います。むしろきちんと自虐に陥っていたならば、もつとましな国になっていたかもしれません。

日本に誇りを持ってといって、そもそも陥ったこともない自虐史観を持ち出すのはお門違いも甚だしいと言わざるを得ません。日本人の美質とされる人の優しさ、清潔さ等、みな戦後の豊かさによって保たれ培われたものでもあるのです。今この豊かさに不安を生じ、国民が自信を持ってなくなったからといって、国に誇りを持ってないことの罪を自虐史観というでっち上げの冤罪犯に被せ、真犯人がまんまと逃げおおせるでは、為政者として職務怠慢というべきではないでしょうか。

おそらく安倍首相に他意はないでしょう。純粹な思いで先のメッセージを語っているの

だと思えます。とはいえ教育に力を入れるというなら、まず現状足りていないところに十分な予算をつけることが先決で、最優先事項が子供に修正主義史観を教えることであつてはならないと思えます。

中学校時代のY先生のことをよく思い出します。教科は数学だったか古文だったか思い出せません。身長が我々子供達の誰よりも低く、スバル360が先生の愛車でした。

授業が始まる前、悪たれのひとりが黒板の上の方に横一本チョークで線を引き、「Yの限界線」と書きました。教室に入って来たY先生は目をパチパチさせてこれを一生懸命消そうとするのですが、ジャンプしても届かないので皆大爆笑です。

そんなY先生が遠足のバスの中で、当時流行っていた尾崎紀世彦の「また逢う日まで」を歌いました。あまりにも下手過ぎて、一節

ごとに爆笑の渦でしたが、目をキラキラとさせ嬉しそうに歌う先生の姿はなぜか私にとつて終生忘れられないものとなりました。

政権として教育に対する関心が高いのは結構ですが、何を教えるかということに目くじらを立てても意味がないように思います。何を教わったところで、結局残るのはY先生の思い出のようなものなのですから。

母校への思いがそんな他愛もない思い出とともにあるように、母国に対する思いもそこはかとなくあるべきものでしょう。愛国心を教えるという発想には違和感を禁じえませんが。

(キリン社会保険労務士事務所事務長)

